慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	シュマーレンバッハの経営経済学研究方法について（二）
Sub Title	Method of study in Schmalenbach's Betriebswirtschaftslehre
Author	小高, 泰雄 古沢, 源刀
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1949
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.42, No.2 (1949. 2) ,p.75(1)- 93(19)
JaLC DOI	10.14991/001.19490201-0001
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19490201-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

樋口勝彦著
ローマ風俗考
食事・朗讀
A5判 二六四頁 定價 二八〇圓
漱石の「猫」で誰も知つてゐる孔雀の舌料理の書は決して根も葉もないものではなかつた。本書は維向の本文に典據を求めて、ローマの宴席の豪華さと、當時の文人の作品發表に纏はる風習とを詳細に描き出して、ローマ盛時の繪卷を繰り擴げる思ひあらしめる。

藤林敬三・井原紀著
勞働組合保障
——クローズド・シヨップの問題——
B6判 二三二頁 定價 一三〇圓
勞働協約の骨子をなすシヨップ制の問題を我國において最も早く手を着けた井原教授の研究に戰後の日米兩勞働運動の概況、我國組合の實例を加筆の上、藤林教授の懇切なる校閲・補正を得て勞働組合保障の參考たるべく完璧を期した。

慶應出版社

三田學會雜誌 第四十二卷 第二號 昭和二十四年二月

シュマーレンバッハの經營經濟學研究方法について(二)

小高泰雄
古澤源刀

四

シュマーレンバッハ教授の計算に關する勞作は實際上に於て一般或は特殊の場合に會計單位に該當する原價部分を算定する爲に如何なる方法を採るかを確定する意圖を以て主として原價計算の問題を研究したものである。計算の諸基準並びに處理方法を開示し完成することが本問題の方法論的取扱方に本質的重要性をもつてゐる。原價の大きさはそれ自體としては既に與へられ或は全體として前提されて居る。それ故計算問題の研究に於ては全く評價の問題を取扱はず、專ら原價算定と測定の技術上の原理を取扱つて居る。それは本來教授の出發點であつたのである。

(註一) 教授の『製造原價算定の技術』に引續いて原價計算に關する一連のモノグラフが現はれたが此著書の中で「處理方法」が主として研究の對象となつてゐる、教授自ら述べて居る如く單に種々の生産原價算定の技術的方法を取扱つ

て居る。併し乍ら教授はその際に、生産原價と生産との種々なる局面に於ける關聯が取扱はれて居る點がありとすればそれが生産原價算定理論の固有の對象を爲して居ることを承知して居たのである。其研究は商業研究雜誌に發表せられた。此研究への第一の豫備的著作は二つの研究となつて現はれ、此うちの最初のものは既に一八九九年に獨逸金屬産業新聞に發表して居る。（註二）二番目の研究は一九〇三年に『大工業經營に於ける計算價格』Die Verrechnungspreise in Grossindustriellen Betrieben について大學教授資格獲得論文として公にして居る。教授は後日理解したるが如く玆に根本的の問題を見、特に教授の學說の二つの支柱となつて居る比例率と計算價格に關する理論は一つに統一されないで然もほとんど完全に組立てられた。しかのみならず部分的には理論的成果は精緻を極め、その論旨はウイーンの講義に於て學界に問題を投げた程であつた。それにも拘はらず教授は之を斷片的に研究を推し進め乍ら問題を引繼ぎ存續せしめ十年を經て更に問題を採り上げて驚くべき結論を與へたのであつた。吾人は此問題の解決を遲々たらしめた諸理由を更に追及することを斷念し、一九一九年に至つて本問題を取上げ之に決定的解決を與へたことを確言することを以て滿足せねばならない。當時既にそれは原價分割の技術問題に止るものではなく、技術問題は單に第二義的問題であつた。原價評價の問題卽ち經營の經濟的活動目標達成の手段として評價の問題は理論的觀察の重點であつた。經濟することは選擇を意味する。而して個人的選擇をすると云ふ事象は評價することを前提として居る。教授は評價の結果を計算價値と名付けた。經營（構成）に於ける計算價値の形成と其作用は教授の原價理論の核心を爲して居る。數學的に確定せられる計算價値は經營の選擇現象を正しく指導する役目をもつてゐる。（註三）かくて教授の原價理論は經營によつて一定の方向に諸財貨の諸量を適宜操作せんが爲原價諸財の意識的な評價を重視せねばならぬとする。個々の原價は其の種類と生産量に從つて種々な割合に變化する。教授は此根本的事實から或一定の限界内に於て生産數量の多少は一定の原價額によつて相違するとの結論に達したのである。かくて全般的並びに部分的の經營組織と之によつて實施せるべき價格政策の重要なる結論も生まれて來る。又原價の伸縮性の現象から最適點に從つて經濟する（經營する）原理を發展せしめやうと試みた。教授が組織論上の見地から計算價値を重視したのはこうした理由からであつた。教授は計算價値を大經營を安全且容易に組織するが爲めの『最良且有益なる手段』であり、『最上且最賢明なる原則』にして『組織の最重要なる方法』であるとした。（註四）

教授はビューヘァー・ベーム・バウエルク其他に近い見解を以て交易經濟を迂回生産と呼んだ。原生産者から最後の消費に至る此迂回が錯雜するに從ひ、國民經濟學者からも原價計算論者からも極めて重視せらるべき現象が生じてゐるにも拘らず看過されてゐることを指摘してゐる。それは操業度の變動に對する經營の依存度と感受性の問題である。

低操業に於ける費用遞減と過度の操業に於ける費用の遞增との間の變動が大經營と密接な關係にあると云ふことが出來やう又此現象を以て一種の自然法則と看做して居り、大經營が小經營に比し生産能率のいゝ結果收益上如何に優れてゐるか判明するまで永くその作用が問題にされなかつたとも云へやう。併し乍ら普通操業に於て早くも强い作用の費用遞減が恐らくは同時費用遞增と關聯して個々の經營部門に現はるときは經營構成に缺陷のあることを示してゐる。それを無視するときは經營經濟の崩壞に導かねばならない。普通操業に於ては費用の遞增は平衡を保つて居らねばならぬことは經驗により確言し得らるゝ所である。全體として見るならば費用の動きは正確に或はほゞ正確に操業に比例して變化すると云ふ形で表明されて居る。個々の經營部分が比較的良好な相互に調和とれて居るやうな狀態に到達し、且その狀態に規正して行くのを教授は原價計算の主要なる機能なり考へたのであつた。經營内部に於ても市

場に於ける價格の作用と同樣に良好なる卽ち有用なる企業は榮え、不良なるものは沒落へその作用が働かねばならぬ。計算價値は經營が其給付を經濟的方法で提供する樣絕えず之を規正していく作用を營まねばならぬ刺激器管である。それは經營をして最高經濟的給付をなし得る方向を指示するものである。こゝに比例率の意義があり、教授が新しく命名した限界原價（Grenz Kosten）の重要性がある。教授は就中此の限界原價に經營を過度の遞減或は遞增現象から解放せんとする能力を與へたのである。

教授はウィーンに於ける講義並に原價計算論の最近版に於て經營原價構成の法則から個別經濟の範圍を超脫して結論して居る。經營の內部に於ける原價の變動を觀察し、之に基いて人類の經濟の全組織特にその一つの發展段階から更に他の段階への移行（Übergang）は原價の構成內容の變化に依つて影響を受くるのみならず、移行を餘儀なくせられることを確言し得るものと信じたのである。教授は生產原價が本質上比例的性質をもつて居るが故にのみ私有資本に基く自由經濟の時期があり得たと考へたのである。かくて教授は當時固定費の增大しつゝある兆を看て拘束經濟が到來せねばならぬ所以を豫言し得るものと信じたのであつた。經營規模の絕えざる擴張による固定費の增加は、經營合理化に關する諸方策並びに之と關聯する資本の收約（Kapital intensität）等によつて單に個別的經營のみならず、全經濟を絕えず、新費用遞減の飽和點へ向はしめ需要の減少を見つゝあるにも拘はらず能力を發揮せしめて更に遞減せる原價を以て活動しつゝある部門を活潑ならしめ經營を壓迫して其平準以上に擴張せしめんとした。こゝに近代經濟社會は、かつての自由主義社會が、需要と供給との自然的調和を齎した舵機を失ふに至つた最大の原因が存すると考へたのである。

さて、教授は固定費が增嵩せらるゝ狀況に於て、市場の變動の均衡を計る場合自由市場に於ける場合よりも一層消費者の立場が反映する樣省みる要があることを主張してゐる此目的のために價格政策が重要となるとした。

教授は現在多くの人達によつて實行されてゐる如き、價格安定策によつて景氣變動を平調化せんとする政策をとるよりは寧ろ好景氣には價格を上昇せしめ不景氣の際には價格を低落せしめることによつて景氣の變動に迅速且强力に適應して景氣の均衡を招來するに一層適して居るとの見解を抱いて居る。かやうな價格政策は恐慌時に於いては外國より國內產業が利益を享受する點に於て非常なる得策であつたと云へよう。拘束經濟の眞の調整者は市場價格ではなくて計算價値である……教授は計算價値が今日の過渡的經濟を緩和しその過超能力を除去し、景氣の損害を適當なる程度に減少せしめて經營の完全遂行を保證する。卽ち一言にて云へば新經濟制度に於ても經濟の原則を有效に働かしむる特性を有するものであると述べて居る。比例率を利用することによつてのみ國民經濟と同樣經營經濟にも經濟性が保證されるものとした。

註一　Leitner; Selbstkostenrichnung industrieler Betrieb. 9 aufl. Frankfurt u. M. Vorwart

註二　Schmalenbach; Buchführung u. Kalkulation in Fabrikgeschäftl, Nachdruck, Leip 1928.

註三　Schmalenbach; Selbstrechnung. 5 aufl. S. 155.

註四　a. a. O. S, s-16.

五

貸借對照表問題を解明せんが爲には當時の客觀的情勢は一見好都合であつた。何となれば貸借對照表の本質に關する問題は當時、單に經濟上のみに限らず多方面に於いて論議せられ、文獻も多く存してゐたからである。しかし此等の文獻を知るものは、此等從來の研究が總て貸借對照表の形式的方面のみの研究に止まつてその實質方面については

全く不充分な研究のみでその注意がその表面にすら殆んど向られてゐない狀況にあつたことを理解し得るであらう。この事は同樣に商業學的研究についても又これに非常に依存して居る國民經濟學的研究についても更に又法律學的研究についても同樣にあてはまる。或論者は貸借對照表は貸借二重性の首尾一貫した計算制度から導かれる結論的映像であり、之によつて財產狀況並に各企業の期間利潤が容易に算出し得るものとしたるに反し他の論者は第一に法律の諸規定の機能であるとした。その解釋は經濟法學者及法學見地から影響を受けた商業學者が支持する所である。何等他に影響する所なかつた若干のものを別にすれば第二次大戰までに「企業の見地に立つた貸借對照表」即ち、專ら經濟的見地に立つて經濟的諸基準を求めんとしたものはなかつたと言ふも過言ではない。かゝる狀勢にあつて實際界も此缺陷を除去せんとしなかつたことを注目せねばならぬ。それは商法の諸規定と密接な關係があるものであり、貸借對照表を使用して何を求むべきかその結果が經濟運行に如何に價値あるものを得ることが出來たかなどについて學問上に於ても實際界に於ても何等考へがなかつたのである。

動的貸借對照表の骨子は先づ一九一九年にZFHに始めて發表されたものであるがそれは偶然の思ひ付きの研究ではなくて、多年共鬪の產物であり、教授の經驗一般の精神であり最も圓熟せるものであり教授の研究心の賜と云はねばならぬ。これに關する教授の最初の足跡は教授の學究的教師としての活動の初期に溯る。即ち一九〇八年に既に問題の核心を突いた「財產貸借對照表か利潤算定の貸借對照表か」„Vermögensbilanz oder Gewinnermittlungsbilanz?"（註一）の論題で動的デイナミッシュな見地から減價銷却の問題を究明せんと試みた論文を出してゐる。「貸借對照表の目的について」„über den Zeck der Bilanz„ なる別の論文同じ問題を取扱つてゐる（註二）又他の簿記技術論特に「簿記法規」（Buchführugsrech）なる批評的の勞作に於ても亦教授の同じ本質的問題によつて貫かれて居る。

それは考へ方の一片に過ぎず正に完結せる理論としてまた統一的關聯を缺いてゐる。教授は此研究を回觀して自ら『私の個々の論文を順を追ふて研究するならば如何に私が今日主張してゐる見解に私が徐々近づいていつたかを明らかに認識し得るであらう。此の基礎は比較的早い時期に於て既に得たものであるが完成には可成り長い期間を要したことを理解し得るであらう』（註三）

と述べて居る。

一九一六年には餘り目立たぬ一層簡潔なほとんど四頁に滿たぬ「成果貸借對照表の理論」„Theorie der Erfolgsbilanz"と題する論文を發表しこの中で動的貸借對照表の指導原理を實に簡潔なる形式で展開してゐる。併し乍らその理論が科學的基礎付を與へられて現はれるまでに更に三年を要した。しかしこれすら一九二六年動的貸借對照表の第四版以後表明された骨子に比較して見ると、詳しく記載されたスケッチ程度を出でぬ樣に思はれる。

教授の功績に歸せられる「解放行爲」は貸借對照表を優れた簿記技術的或は法學的の問題として看做すことを斷念し、この貸借對照表現象は經營經濟並び經濟一般の制度及び機關の諸關聯の中に存するものとし、この關聯を通して從ら研究されさるべきであるとしたことである。教授が研究したことは根本に於ては貸借對照表ではなくて貸借對照表の背後にあつて遂には貸借對照表の形態を採る現象である。教授の研究の對象としたものは原價計算の場合と同樣全體としての個別經濟であるが組織の面からでなく金融面から出發し、即ち國民經濟的貨幣計算の獨立的部門と目的を有する單位としてのそれである。

教授が主として留意して居る點は或期間に經濟活動の結果生ずる所の資本の增加である。其成果を測定する問題は

企業の解散の場合實際に行はれる樣に當初の貨幣額（支出額）と終末に於ける貨幣額（收入）とを對比し、經濟期間の積極的若くは消極的成果たる貨幣の增加乃至減少について算定され得るとするならば極めて簡單であらう。

活動する經營の存續期間のうちでその部分的期間のみを意味する經濟的成果計算はこゝに大いなる困難にぶつかる。即ち計算さるゝ期間の收入と支出は相互對應して現はれず支出も收入も一部は將來の期間に一部分は過去の期間或は當該期間にと云ふ樣に分斷されることである。此現象は貨幣の支出なる事實が經濟的生產を可能するものに非らずして支出によつて實現せらるゝ消費效用が經濟的效果を齎らすからである。經營と經濟のこの二つの根本的事象は上述の事情によつて種々なる段階に分離される。此等の段階は相互に確然と區分しなければならぬ。支出なる事象は支出――調達（購賣）――費用（經營給付遂行の爲）に分ち、同樣に收入なる事象は給付――販賣――收入の各段階に區別しなければならぬ。計算を集計する場合には經濟的效果を明瞭ならしむる爲には此の系列（支出――調達――費用――給付――販賣收入）の端初と終末即ち支出と收入とを相互に比較せしむるを以て充分であらう。此場合費用は支出なる概念と給付は收入なる概念と實體的には同一合體せらるゝからである。併し乍ら持續的經營に於ては支出費用の間並びに給付――收入との間を合體することは時間のずれの爲不可能であるが故に上述の如き端初と終末との比較と云ふが如きことは經營狀態並びに經濟に於ける經營活動の效果について全く誤つた觀念を生ぜしめるのである。成果算定について誤なからしむる爲には支出と收入の期間的（時間的）分離を行ふ手段を必要不可缺たらしむるに至る。即ち或る計算期間に於て其經濟的成果を齎らす原因であつた費用及收益の要素が爾後の期間に至つて始めて費用及給付となる、若くは爾後に支出と給付の性格を帶びるに至る費用と收入から收支計算上に於て判然と區分する方法が必要となる。この手段こそ教授が貸借對照表と名付くるものである。之は一方に於て支出と收入を他方に於て費用と收入とを期間的區分計算の目的を以つて聯結してゐる機能を果すものである。貸借對照表の積極なる側には經營の次ぎの如き經營の前給付が包含せられてゐる。

1. 費用又は再收入としても實現してゐない支出
2. 收入又は費用としても實現してゐない給付
3. 貸　　幣

を、消極側には經營の後給付を記錄し次ぎの

1. 支出或は給付として未だ實現してゐない費用を
2. 未だ給付若くは再支出にならざる收入

を表示する。

教授が利潤と爲さんとする所のものは當初の資本が經濟期間末に於ける資本を超過する貨幣の增加餘剩額ではない。教授は積極消極の兩側に於ける經營の諸力を測定すること即ち經營に投下された資本を實質的に管理して經濟的利用し得る企業の能力を測定することを遙かに重要であると考へたのである。それ故教授は或一定の一回限りの狀態を算定することを重視せず、一つの成果を招來した動的諸事象、一定の計算期間の働的區分を超へて更に將來の成果の構成要素として見らるゝ諸事象をその作用とその可能性に於て認識せんとする獨特の目的に傾注したのである。かくの如き目的を提唱することによつて教授は貸借對照表を單に財產確定の手段とする諸見解と更に貸借對照表を以て財產並びに成果の兩者を一度に算定せん兩目標を有すると爲す諸見解とも異つてゐる。教授は貸借對照表を以て財產確定手段としては不適當なるが故に此靜的見解に反對すると共に貸借對照表に二つの目的を附與することは其計算を誤

り之によつて評價原理の統一性を損ふが故に財産及成果の算定と云ふが如き二元的見解にも反對したのであつた。教授によれば貸借對照表の可能なる目的が競合する場合は或一つのものが唯一の優秀さを主張し得るものとした。教授は規準貸借對照表（Normal bilanzer）としては他目的に比し動的目的を付與するを以て無條件に優れてゐるとした。教授によれば貸借對照表は專ら利益算定の手段であり、成果計算に役立てる爲には如何に貸借對照表を構成すべきか教授獨特の研究對象であつた。

註一　Z. H. F. 3 Jahrg. S. 81 ff.
註二　Z. H. F. 5 Jahrg. S. 379 ff.
註三　Schmalenbach; Dynamische Bilanz 4 Aufl. Einleitung.

六

何を利潤と看做すべきかについて意見の一致を見ないのはその經營の經濟活動が引續き行はれると云ふ前提に立つならば連續作業遂行の爲め生産過程に配置されてゐる諸財が絶えず市場の變動の影響に曝されてゐることに起因してゐる。市場の變動によつて一定せる經營目的を達成せしむる諸財の性質が更に問題となる。市場の影響を受けて變動する經營諸財の有用性が諸財貨が配置し指向されてゐるその成果能力を絶えず變化させると云ふことが出來る。利潤問題が實際上に於て當面する一般的形態は經營經濟の成果目的を達成せんとする實質的經營財の價値の蒙むるところの諸變動が屢々衝突し、重復し、多くの場合は平行して生ずるが結局に於いて價値の大きさに何らかの餘剰を生せしむる如きものとなるのである。

實質的財産の集團の增加若くは減少が利潤の增加と減少に於て測定されるか或は單に名目的な利潤の增加若しくは減少が確定し得るものかどうか利潤數字が經過期間に於ける經濟的效果を表現すべきか或は利潤に、その將來發展の可能性を共に考慮しなければならぬか等については理論上並びに實際上可成り意見の相違が有するのである。教授は此等諸種の見解意見、解釋を統一せんとは試みなかつたが利潤概念を單一な何等か意味ある形式に取纒め難いことは認識してゐた。それ故利潤概念を發見せんとはせずあらゆる利潤概念の可能性の中より實行せんとする目的に最も適切なるものを摘出せんとしたのである。教授が利潤なる表現によつて意味したるものは一定の前提から算定されたる計算利潤（Rechungs-gewim）に外ならず之は或意味に於て事實上求めんとしたるものとは異なるものである。經營の連續に於ける全く非難のない利潤算定は頗る困難であつたので教授は最初から無條件な正確さを斷念し正確さに於ける不充分なることを補ふ程度の可能なる範圍に於ける計算利潤としたのである。教授は利潤の絶對的大きさよりも一般的經營發展に對する相對的關係を遙かに重視したのである。經營發展に對する相對的關係が如何に上昇し如何に低下するか如何なる程度に變化するか此等に對する尺度を得る事を絶對的利潤數字を獲得するより重要なりと考へた。それ故教授は經營構成上に於ける內外の影響の作用其成否を適時認識してその對策を謬らざる樣にすることを成果計算（Erfolgsrechung）の重要なる任務なりとしたのであつた。

『積極並に消極の諸力の作用の影響が適正な時期に表明せられてゐるとき其成果はよく計算されて居り、その諸力が既に下向の方向を辿りつゝある際成果の數字が尙上昇を表はして居る場合は惡く計算されてゐる』（註一）

實際上に於て利潤なりと看做されて居るあらゆる利潤がシュマーレンバッハ教授の意味する所の利潤とは云へぬ。たゞ經營の價値造出活動（Wertschaffende Tätigkeit der Betrieb）から費用と給付の餘剰として生成する餘剰價値（Mehr weit）のみが成果計算によつて把握せられねばならぬ。それ故に又經營の經濟性について出來得る限り透徹

した觀念を得ることが成果計算の目標とする所である。それ故に教授にとつて興味ある事は私經濟的營利の組織としての經營ではなく、商人が彼の仕事に際し、財を浪消させぬ樣に經濟的行爲を取運ぶといふ根本事項にあつた。教授は經濟的觀察を私經濟的職能でなく國家經濟的職能上に重點を置いたのである。（註二）教授は經營が就中如何にして且如何なる方法で共同經濟的生産性を示すかを認識しやうとした。それ故かゝる成果計算の理論的目的は私經濟的利潤でなくて經營の國家經濟的器管としての重要性を反映する共同團體的利潤でなければならぬ。吾人は教授が、共同經濟的厚生を顧慮せざる投機と利潤追求を否定する經營觀を表明してゐるところの規範經營經濟學派の考へ方に極めて接近して居ることを理解することが出來る。

教授の見解に從へば利潤は三つ原因に歸せられる。第一の原因は全體として企業の有用性と稀少性に存してゐる。全體經濟に於ける變化は常に收益力の變化を伴ふところの個別經濟單位の評價の變化を誘發する。第二の原因は景氣の上下並びに季候と流行によつて惹き起された收益の變動である。此等は絶えず經濟の變化狀況に測應することを要求してゐる。第三の原因は歸する所節約と豫想、勤勉と手練の作用であり計算技術上經營の仕方（Betriebes Gebarung）と呼ばれるものである。

期間的利益計算は普通の樣式で利益を其根本構成要素（市場、景氣及經營利益）に分解はしない。此等影響を明らかならしむるは利益計算外に行はれる特別計算の任務である。期間計算は寧ろ此等利益の影響總ての共同作用に對する基準をもつべきであるとした。利益計算が認識すべきは單に此等の諸力の一つが上下するか否かのみでなく諸力は總て利潤計算に表示されねばならない各個に分離することは經濟運營の羅針盤として且經營實施の尺度としての性能を少からしめるものである。教授に從へば

1. 不經濟的經營はその不經濟性を認識し經濟的に組成するか停止するかすること
2. 之に反し經濟的企業者には、先づ第一全體經濟の利害關係に於て最も經濟的な企業者には發展の可能性が與へられ、國民經濟に於ける充用し得べき資本が振り向けられること
3. 經濟的に不適當なものは出來るだけ後方に押し除け、經濟的能力あるものを上記に從つて之を推薦し經濟的指導中適切なる選擇を行はしむること

以上を利益の最高機能としたのである。（註三）

七

シュマーレンバッハ教授はその組織的技術的見解と經營の兩つの重要問題に對する鋭い集中的研究によつて經營經濟學に於て、然も二つの方向に一學派を創始した。教授以前に何人も豫期し得なかつた程の卓越せる方法と熱心さを披瀝してその專門科學的思惟を有效に働かせたのである。而して同時に教授の計畫の二大目標たる科學を實際と結びつけることを完遂することに成功したのである。ワルブ教授が『この專門――これを人が何と命名しやうとも――實際經濟についてはインフレーションの頃まで充分注意を拂はなかつたことは疑ひのない所である、その專門に注意を拂はしめたのは恐らくシューマーレンバッハ教授の功績であらう』（註四）と語つたが吾人の全く同感とする所である。就中教授の特色ある實際感、即ち、經濟の要求に對する絶えざる感受性更に又教授の傳統、慣習に對する周密なる注意が之を可能ならしめたのである。教授は實に實際界を絶えず指導しやうとした。而し又教授の問題としたのはその徹底した理論を以つて偶然的派生現象や實際界の行動に内在する所の歴史的誤謬を是正するための處理として思惟しやうと考へることであつた。（註五）教授は實際生活に基く理論や處理に高い認識價値を認めたのであつた。教

授は其著動的貸借對照表論に、傳統慣習の重要のため獨特の章を割愛して安易に改革の熱望に信倚するの危險を警告し、到る所で傳統に結び付ける樣注意を與へて居る。教授は絶えず教授の主張せる科學の實際面を强調することに努力し、科學がその研究と成果を以て實用に供せらるゝ限り科學の存在權を認める樣努めたのである。教授は又學問上の指導者として其研究の成果に忠實であつた。教授は經濟の種々なる要路に於て穩健且一見根强く教授の思想を普及させて居る非常に多數の弟子達にとつて無比の有力なる指導者として看做れたばかりでなく最上級の科學一般に對する全く稀に見る教育者の一人であつたのである。教授はその雜誌に於て指導者として活潑なる働きを示したことは更に一層詳しく特記に値する所である。教授が經營經濟學上に非常に盡粹したことは經營經濟學に特殊の型を生む機緣となつた。教授の學說に立脚して教授を巡る人達に既に著名なる學派を見るに至つた就中ケルンのワルブ教授フライブルグのマーベルグ教授はそれ等の知られたる指導者である。兩者とも師シュマーレンバッハの學說を種々なる方向に擴充發展して組織せんとして興味ある研究を試みて居る。ワルブは既に史上に於てカメラリズム時代に國家によつて指導された經濟政策に內在せるその意義を經營經濟學に再現せんと試み、マールベルクは拘束經濟の到來を正當に信ぜず經營經濟學に任務を課し各部門並びに營業部門の內部並に相互間に經濟的調和を現出せしめんとし一方固定費の重壓を受くる經營を如何に正しく運營すべきかその方途を指示して、直接自由經濟の規正と再建に寄與し、拘束經濟本來の牙城を壞滅せしめんと試みたのであつた。（註六）其他の有名なる研究者もシューマーレンバッハ教授を基礎とし問題の提起並びに方法論上に於て教授に負ふ所大なるものがある。その若干を擧げればドレスデンのベステ・ケルンのゲルドマッヒヤー・ニュールンベルグのレーマン・ベルリンのメエレロヴィツ・ニュールベルグのイサーク等である。

專門科學發展に對する教授の偉大なる功績を認めるに吝かではないが特に經營經濟學がシュマーレンバッハ教授によつて完全なる成立を遂げ得たりとする見解には反對せねばならぬ。卽ち經營經濟學が教授の働きによつて或一定の結論に達しかくて最早や深さではなく單に廣さに於てのみ發展する可能性ありと爲す見解がある。これは教授の亞流を汲む範圍に於て一つの信條となりつゝある見解のようであるが、又吾人の眼前に横はる教授の稀に見る業績は尙多方面に於て一層の完成と根本問題の究明を必要とするものである。此點は後代のものが教授の學恩に負ふ所大なるものがあるに不拘明らかに述べねばならぬ。教授の學說が決して其自體として完成せる、關聯せる全體に統一されては居らぬことは多分教授自身誰よりもよく認識せる所であらう。教授は既に自身經營經濟學の體系が成立して居ると云ふ確信を持つて居なかつたからであり、たゞそれには未だ時期尙早であるとの考へがあつたに過ぎぬ。勿論研究の進歩のためには詳細なる資料を蒐集することは極めて必要であるが又個々資料の集積は云はゞその外部的助力なしに其自身決して統一計畫的全體への集成を齎らすものではない。單なる經驗から同樣に科學的體系は形成されぬ。それには自然の結晶體の如く經驗的事象（所與）を統合するが爲にはアプリオに必ず根本觀念が存在するを要する。教授の全業績に於て最も多く眼につく事は經濟構造の組成に於て纖細なる部分並に全體への統合の缺除せる點である。教授は此科學の全研究のうちで確かに非組織的の人であつた。個々の點に於てはより多面的であり、實際にはより詳密を極めて居り、結果のより困難なる點もあつたが全體の統合觀察に於ては教授の陣營に屬する多くの人達より更に不確實貧弱なものがあつた。此科學の今日の高き水準は第一に此等人達の協力に負ふ所のものである。

根本的重要なる二點に於て、教授の主張する經營經濟學は重要且つ缺くべからざる基礎（Rein stein）であると同時に、完結せるものとは看做し得ないことを示すことが出來る。教授は多くの場合經營經濟學の認識目的は單に企業

に限らるべきものではないことを强調して居る「又經濟的國家經營例へば國營鐵道並郵便經營、又陸海軍の消費經營はほゞ株式會社の經營同樣吾人に興味あることである」（註七）しかし教授が三十年の活動に於て示した研究範圍は根本に於ては單に商事經營經濟學に限られ且又これすら完全に研究し得なかつたことを客觀的に確言し得らるゝことである。教授は商業、銀行、交通經營の學說については比較的僅かな研究を遂げたるに反し、研究上の重點としたところは工業經營にあつた。商業企業の問題特にシュマーレンバッハ教授の經營經濟學に關聯して教授のグループ中に於て最も頭腦明晰である一人たるワルプが明白に或修正を附け加へたのである。ワルプは今日經營經濟學なる名稱で教授されて居るものは商事經營に該當し此研究からの成果であつて羊頭を掲げて狗肉を賣る類であると云ふ。（註八）この點については又ニツクリッヒの觀念に影響されて居る、マールベルグの經營經濟學原理二卷の說明も明らかである。全般的各個經濟まで經營概念を擴張せんとする努力をシュマーレンバッハ教授の一派が特別にとりあげて居る研究範圍と比較する時はこの努力がかやうな概念の一般的解釋と如何に對立し異つて居るかを知り得るであらう。上述の著述に於いてマールベルグの歩んで居るところが典型的一例である。マールベルグはこの經營概念に最も包括な意義を與へた後彼は再び其研究を專ら商事經營學に限定したそれは第一には彼の個人的資格によつてであり、第二は商事經營學が其議論を既に廣い立場に立つ樣完成されて居るからであつた。廣義の經營概念は究極に企業の經營に外ならぬのである。（註九）

教授の學說に對する最も嚴しい非難は教授が經濟性なる概念に誤つた共同經濟的要請を導入することによつて生じた混亂に向けられねばならぬ。教授は新しい觀察上の見地に立つた結果として私經濟的行爲が共同經濟的に作用する限りこれに注意を拂はんとしたのである。教授は經營を以て私的營利組織と看做さず、共同經的濟生產性に寄與する國家經濟的器管なりとした。此經營觀は規範學派（Normativisten）の見解に極めて接近してゐる。從つて教授を此學派の思想から除外して分類したことに全く驚かれるに違いない。

教授が經營の共同經濟的機能に關する根本命題を提出して共同經濟の必然性を主張したが更に進んで之にについて關係せず經營の實際上の形成に何等のその影響を認めなかつたので上述の如く分類することは非論理的ではない。何となれば教授が例へば好商的投機利潤を經營運行の經濟性に對する證明として看做すことを否定したことは經營經濟に於ける共同經濟的立場を承認することを好んでぬたことに對する確乎たる理由ではないからである。之はディトリッヒ・ニクリッヒ等の學者の主張によつて論理一貫して爲されたのと同樣である。然るに教授の利益計算の目標は實際は共同經濟的な利益でなくて私經濟的なものである。之は私經濟的利益には計算者の必要な確實さと好意とがあるからである。根本的に云へば教授の經濟性は彼の主張した共同經濟的生產性一般と何等關係はなくて……收益性に外ならない。何故に教授は共同經濟的利益を欲するに至つたか、しかして併し實際は寧ろ私經濟的利益を算定しながら遂には私經濟的收益は吾人が本來測定せんとしたものではないと告白せんとするに至つたか、こゝに大きい煩瑣哲學的決定論が介在する。この混亂せる事實に關し吾人は貸借對照表論に於て二元論者に對し教授自ら語つた次の言葉を想起せざるを得ない。

「そはコペルニクスがその窮迫した立場に立されたときよく用ひた樣である、彼は地球は決して球體でなくて平面である。併し乍ら此平面に於ては總ての直線を正しく考へねばならない。然も直線は凡て一樣に曲り、相接すると云ふ樣な形式で云はねばならなかつた」。（註一〇）人はリーガーの如く私經濟的經濟性を私經濟的收益性と同一視し、自分の考へに依れば經營の經濟性は收益性によつて表示される。自分は他の經濟性については知らぬ。經營が貨幣的

餘剰を目的とする限り經營は私經濟的見地から、財貨の消費が如何なる原理によつて行はれても健全であり、全く同じである。とも云へるし、又ニックリッヒと共に次の如く云ふことが出來る。經營の經濟性は利益から獨立してゐる一つの大きさである。それは利益が發生する以前に存在せねばならぬ。而してそはその目標とする利潤の高さによつて測ることは出來ぬ。何となれば利益は價値生産の經濟性が反映するのでなくその時々の市場の情勢が反映するからである。

併し乍ら收益を共同經濟的利益と同一視し經營の生産性を測定し得るやう教授は個人主義的交易經濟に於ては私經濟的效用は終局に於て何等かの團體的厚生と一致しなければならぬと云ふ議論を取出し繰返し乍ら上述の測定とした教授は自ら云ふてゐるように理論的根據が薄弱なることを確信して居り乍ら之を敢てしたのである。教授が根本的に誤つて居るのは經濟性でなく全く經營の收益性でありしかも私經濟的收益性である。それは經濟生活にとつて極めて重要なる事實である。併し乍らそうであるときは明らかにそれを語られねばならぬ。私經濟的收益觀を共同經濟的生産性の觀念と混同したのは不幸であり、而して又教授によつて確信を以て解決されなかつたのである。共同經濟的生産性の意味に於ける經濟性を測定するには――この點については正にニックリッヒリーガー其他を擧げることが出來る――私經濟的收益は不適當である。

又內部的經營問題に研究を限定すること共に經營經濟學をシスモンデイの云ふ計算學 science de calcul に完成しやうとする教授の强い傾向は嚴密に學者間にその矛盾が發見された。特にライトナーは早い時期に於て孤立的觀察はそれ自體に危險を內包することを指摘した。その危險は經營の內部作用のみを分析するが爲重要なる事象の作用の經濟外の原因を認識せざる點に存する。經營經濟學の周邊に自ら發生して來る魔術的方面を破碎し精神的自己滿足と孤立とを追放し理論的經營を制限しその發展の傾向と全體經濟、と社會との關聯等研究することによりその處野を擴大せんとするには、時が必要である樣考へられる。（一九四八、一〇、一一）

以上

註一　Schmalenbach; Dynamische Bailanz. 4 aufl. S. 107.
註二　a. a. O., S. 94.
註三　a. a. O., S. 9.
註四　Walb. z. H. F.1928. S. 511.
註五　Schmalenbach, Dynamische Bilanz 2 aufl. S. 3.
註六　Mahlberg- Kapitalleitung u. Betriebwirtschaftlehre. Z. H. F. 1930. S. 556.
註七　Schmalenbach, Dynamische Bilanz 4 aufl. S. 94.
註八　Walb. Z. F. B. I Band 1, Jahrg. S. 91.
註九　Mahlberg, Der Betriebsbegriff, u. das system der Betriebswirtschaftslehre (Grundriss der Betriebswirt.) 2 Band. Leipzig S. 45 u. S. 64.
註一〇　Schmalenbach, Dynamische Bilanz, 4 aufl. S. 133.